

絶対依嘱・勇気・前進のための戦い

——あるジャワ人ロームシャの生涯——

染 谷 臣 道*

Absolute Submission to Allah, Bravery and the Fight for Advancement : From a Life History of an Old Javanese *Romusha* in Sabah, Malaysia

Yoshimichi SOMEYA*

In Sabah, many of the *romusha*, or forced laborers, taken from Java by the Japanese Military Government during World War II are still alive. When the war ended, they were obliged to stay in Sabah. Among the natives there, they have earned a reputation for diligence and good conduct, which seems to derive from their efforts to adapt to the different cultures and societies of Sabah. Particular attention should be paid to the ways of thinking of their leaders, who have had a strong influence on their compatriots. Here, I will introduce the life history of one such leader.

This man comes from a village on the north coast of Central Java. He is a pious Muslim and a rational man. Although he came as a *romusha*, he insists that he came of his own will. In thus emphasizing the voluntary aspect and de-emphasizing the passive aspect of the forced labor, he showed his spirit of independence. Now he is well-off, and he attributes his success to absolute submission to the will of Allah, and his own bravery and willingness to fight for advancement.

1993年、コタキナバル市から北西方向約30キロほど行ったトゥアランのある村で、筆者は「ブンガワン・ソロ（ソロ河）」の歌声を聞いた。その村に住み込んでドゥスンの法文化を調査してきた宮本勝氏の帰国に当たって村の人々が送別会を催した時のことであった。

「ブンガワン・ソロ」はいうまでもなくジャワの名曲の一つである。それがサバで歌われた。どのような経過をたどってドゥスンの人々が口ずさむようになったのか。それはよく判らない。しかしそれがジャワ文化流入の一例であったことはまぎれもない事実であった。

インドネシアでは労働力が余り、マレーシアではそれが不足している。隣り合った国の間のこの労働力の不均衡のために、サバ州でも多くのインドネシア人労働者を見かけるようになった。もちろんその大多数はいわゆる出稼ぎで、彼らは数カ月あるいは数年のあいだ働くことや

* 静岡大学人文学部 ; Faculty of Humanities and Social Sciences, Shizuoka University, 836 Ohya, Shizuoka 422, Japan

てインドネシアに戻る。その中には再びサバにやってくる者もいるし、兄弟や同郷者を伴ってくる者もいる。そうした出稼ぎ者のなかにジャワ人も多く含まれている。

若者が圧倒的に多い出稼ぎ者の他に、サバがまだ北ボルネオ特許会社の所有地だった戦前、ゴム園労働者として渡ってきた人々の子孫や本稿で紹介する元ロームシャもたくさん住んでいる。これら多数のインドネシア人は勤勉で、品行方正だとしてサバ社会では概して評判がいい。そういう彼らがジャワ文化の具現者としてサバの人々になんらかの影響を与えてきたことは想像に難くない。彼らの評判は良いわけだが、そのために彼らは地道な努力を積み重ねてきたのであった。

サバのインドネシア人社会を支えている団体がある。「サバ・サラワク在住インドネシア人家族連合 Perhimpunan Keluarga Indonesia Sabah-Sarawak」という名称の組織で、普通、プルキサ (PERKISA) という略称で呼ばれている。プルキサの副会長であるイスマ・マルガンディ氏の説明とプルキサの定款に記載されているところを要約すれば、この団体の目的はサバ・サラワクに住んでいるインドネシア人家族の繁栄を達成し、相互扶助の精神を高め、インドネシアとマレーシアの友好関係を強化することであり、具体的な活動として移動のための書類を作成すること、労働許可証のための便宜、火事・病気・死亡などの災害に遭った人を援助すること、結婚やメッカ巡礼の補助、労働補償の問題を抱えている人の補助、コタキナバルの総領事館から遠い地域に住んでいる人たちのための仲介役、文化・スポーツ・教育活動を通じてメンバーの志気を鼓舞すること、マレーシア王国とインドネシア人地域社会を結びつけることなどとなっている。¹⁾ プルキサができたのは1976年であるが、その母体は1961年に創立された「ジェッセルトン・インドネシア協会」である。

本稿の目的は、この協会を組織した数人の名士のうちの一人に焦点をあて、彼が異国サバの激動の現代史を生き抜くにあたって自らのどのような文化を駆使したのかを明らかにすることである。彼の名前を仮にスキマンとしておこう。スキマン氏は日本軍政時代に強制的にサバに連行されてきたいわゆるロームシャである。彼は戦中そして戦後のイギリス直轄植民地時代、マレーシア独立に際しての「対決」など激動の中を生き抜いてきた。本稿で紹介するように彼はつねに世界史的な試練に積極的に立ち向かい、今日、ゆとりある老後を送っている。彼の6人の子供たちが大病院勤務の看護婦、銀行員、あるいはマレーシア航空の社員や電気技術者などになって社会的に活躍しているのを見るとき彼の人生はひとつの成功物語といってよい。しかし本稿では紙幅の関係で紹介できないが、ロームシャの全てが彼のような人生であったわけではない。むしろ彼のような人生の方が少なかった。

ジャワ文化自体が決して一様ではない。ジャワ人が住む地域は広く、外来文化との接触の度

1) Balai Budaya Indonesia [n. d. : 2], Biro Pen Perkisa [n. d. : 1] 参照。

合いも違えばジャワ内部の交渉史も異なる。階層による違いもある。まして長年外国に住んだジャワ人となればますます大きな変異を見せるだろう。軍政期の日本人、植民地時代の白人そして中国人やカダザン人など現地に住む人々との交渉を通じてさまざまな文化的影響をうけてきたと考えられるからである。その影響も一様ではなく、また、その影響に対する応答も一様ではない。

もちろん、世界のさまざまな地域における似たような現象と比較すれば、ジャワ人に共通する反応の仕方——たとえばいかなる状況に遭遇しようとも我慢強く、耐え抜き、争いを避け、しなやかかつしたたかに対処するといった——をみることができるかもしれない。しかしそうした比較を行うための基礎資料が十分揃っているとはいえないのが現状である。本稿はその基礎資料の一部をなすものである。

スキマン氏は現在コタキナバル市に長男や三男、それに孫たちと一緒に住んでいる。決して豪邸とはいえないが、広い敷地に大きな屋敷を構えており、敷地の一角にはインドネシア人の出稼ぎ者を住ませる貸間もいくつか備えている。夫婦ともときおり軽い病気に悩まされているが、おおむね健康であるといってよい。彼と筆者の会話はジャワ語とインドネシア語あるいはマレーシア語で行われた。ジャワ語はいわゆる敬・準敬体 (*madya krama*) ないし中間準敬体 (*madyantara*) である。²⁾ 以下ではそうした点を考慮し、「です」、「ます」調で訳出した。

I 少年時代のスキマン氏

スキマン氏は1927年に現在の中部ジャワ州グロボガン県プルウォダディ郡ジュワンギで生まれた（従って1992年の調査時点で65歳）。プルウォダディ郡はデマックとソロの中間のデマック寄りにある。またジュワンギはセマランから50キロほどであり、いうまでもなくこの地域はソロ・ジョクジャを中心としたジャワ内陸の山域世界ではなく、ジャワ北海岸の海域世界に属するとみなしてよい。³⁾ 彼は子供時代を次のように語った。

私は7歳のときに親から離れました。私は兄や姉が学校に行くのを助けるために働き始めたのです。親を助けるためでした。親はその当時大変でした。農夫としての収入はわずかだし、商売の収入もわずかでした。だから今日稼いだお金は今日の食べ物を買えばなくなってしまうし、次の日に稼ぐ金もその日のうちになくなってしまうというありさまでした。だから兄たちが学校に行っているのをみると私は学校に行きたくありませんでした。

2) 染谷 [1993: 7] 参照。

3) 染谷 [1995] 参照。

親を見ているとかわいそうになりました。私が金を稼いでくれば少しの足しになると思ったから働き始めたのです。7歳というのは今からみればまだまだ子供ですが、その当時のジャワではそんなものでした。

たとえばあれこれと親が子供に命じて働かせ、お金が入ると子供は親にそれを渡すんです。ジャワでは喜んで親のために稼ごうとしたものです。半セン、5セン、10センなどと少しでも渡さないお金があったりすると殴られました。それは兄が本を買うために使われました。兄弟のなかには学校に行きたい者もいれば父と一緒に働く者もいました。私は学校に行くのも嫌だったが、家にいるのも嫌でした。(賃金は)いくらでもいいから外で働きたいと思っていました。

仕事はいろいろでした。たとえばよそのうちの庭掃除をすればお金がもらえました。その当時、一日仕事をすれば確か10センもらえました。1932年か34年の頃です。「あそこに板がある。何を作るんだろう。何か建物を建ててほしい。よし行って訊いて見よう」

砂の運搬のために人を探している人がいると聞くと天秤棒に一担ぎ運んだらいくらかと訊きに行って働いたものでした。

私は12歳の頃、セマランに行きました。日本が入ってきた42年といえば私はもうセマランに1年いました。待てよ。セマランで働き始めたのは14歳のときだったかな。日本人のところで働きましたよ。40年のときです。セマランでは飛行場の壁作りの仕事をしていました。エンジンをかけるところで操縦士が外から見えないようにジャワ語で「グデアケ」⁴⁾ といって壁を作ったわけです。セマランでは5カ月働いていました。自分だけではなく、たくさんのジャワ人が志願して働いていました。

それから42年には私はバンテンに行きました。バンテンも自分で希望して行きました。友達の斡旋でセマランで働いていた連中が行ったんです。飛行場作りでした。まだ戦闘はありませんでした。戦闘が始まったのは私が海を渡ったときです。もうアメリカの船がいましたよ。

バンテンにいた1942年、私は「日本の旦那が来てほしいといっている」から故郷に戻るよう呼び出され、故郷に戻りました。故郷に戻ると「ボルネオに行きたいか」と聞かれた。道路、飛行場、橋、税関の建物などを作る仕事で、期間は6カ月、もし延長したければそれまでできる、もし希望すれば帰ってもいいということでした。行きたくないといってもだめでした。私の家族からは2人出さなければならなかったからです。私と兄です。拒否はできませんでした。絶対行かなければならなかったんです。その当時、日本軍の命令

4) gedhegake, gedheg が語根で竹壁の意味, ake は他動詞化する接尾辞。

には絶対従わなければならなかったんです。日本軍政府にはとにかく応じるしかなかったんです。だから私は召集を受け入れたんです。でも私は喜んで受け入れたんです。私は出稼ぎのつもりでした。そんなわけで私は喜んで受けたわけです。いやだとはいえなかったんです。兄弟が多かったからです。兄弟が多いと2人召集され、少ないと1人でした。もし男の子がいなければ、女の子が要求されました。日本軍政府は村長に差し出す労務者を割り当て、村長は村民にそれを話しました。

村長は「あその家は子供が何人いるか?」と村人に訊いて(「5人です」という答えを聞いて)「5人か。よし1人だ」「あそこは?」「9人です」「よし、それなら2人だ」といった具合に、差し出す人数を決めました。私の村からは確か20人以上はいたと思います。しかしその多くは戦争中に死にました。村全体の人口は判りませんが、一つの村には7つか8つの集落がありました。そして二つの集落から20人以上の子供が召集を受けたわけです。

17歳で召集を受けた彼の兄は後に戦闘に巻き込まれて死亡した。

II 日本軍時代のスキマン氏

日本時代の日本人はマレー語があまりうまくありませんでしたよ。主人は「これ、これ」、「もってこい、もってこい」、「上等、上等」など片言の日本語を使っていました。馬鹿な人は意味が判らなくってうろうろしていると、「ばかやろー」と怒鳴られて殴られました。何か取ってこいと命令されててものろのろしていると殴られました。早くやらなければならぬからです。可愛そうでした。

下っ端の兵隊は台湾人か朝鮮人か、中国人のような人達でした。マレー語が上手でした。だけど彼らは捕虜でしたし、悪だったんです。本当の日本人はアルース(上品)でした。ジャワでたとえればソロの人のようでした。

私をもっと頭がよかったら日本時代もその後ももっと上の方の仕事をあてがわれていたと思いますよ。私は日本時代にはボーイにさせられました。日本軍の時代にはまだ読み書きができなかったので監督にはなりたくなかったんです。それでボーイにさせられたわけです。

ある日、人が倒れました。

「何であの男は働かないのか?」

「彼は病気なんです」

「どこが悪いんだ?」

「お腹です」

「それなら食べちゃいかん」

「頭が痛いんです」というと「働かなきゃいかん。あっちへ行け。褒美があるぞ」それと言われた方へ行くと殴られました。「働け。働け。働かなきゃいかん。怠けるのはけしからん」

私も日本人に2回殴られました。1回目はこうでした。主人の灰皿に少し水を入れて置いたんです。灰皿に置いたたばこが燃え尽きてしまわないようにするためでした。そうして残った吸い殻を病院にいる病人に持って行って売ったんです。なぜ売ったかというとその当時たばこは売っていなかったからです。吸い殻は一つ5リングットで売りました。たばこを吸えるのは日本の旦那たちだけでした。

ところがついに主人も気が付いたんです。なんで半分しか吸っていないのに消えてしまうのだろうと不審に思ってやっとなんか判ったわけです。そこで私は主人に言った。「全部吸ったら御主人様は病気になってしまいます。たばこの煙が御主人様の体に入って病気になります」と。しかし主人は私のいうことを信じませんでした。「ばかやろー。もうこんなことをしたら承知せんぞ」と言って殴られました。

2回目はこうでした。私はたくさんの食事を主人に出しましたのでいつもたくさん残飯が出ました。私はその残飯を捨てるのはもったいないと思ひまして、ためておいてそれを病院にいる病人にやったんです。病院の食事は十分ではなかったし、たとえお金があっても病院に食べものを売りに来る人はいなかったんです。これもだめだと言われて殴られました。

日本には日本の「やりかた（アダット）」があります。「死ぬことは素晴らしいか（Mati baguskah?）」と聞かれたら「死ぬことは素晴らしいことです。御主人様（Mati bagus, Tuan）」と答えなければならなかったんです。「お許してください。御主人様（Minta ampun, Tuan）」とか、「とんでもございません。御主人様（Jangan, Tuan）」などと答えようものなら殴られました。「お許してください」と答えて殴られ、立ち上がると反対側から殴られました。それが日本の「やりかた」だったんです。私はそういう日本の「やりかた」が判ったもんですからあまり殴られませんでした。

遠くの村に塩を買いに行ったことがありました。売っているものは少しかったです。近くではあまり売っていなかったんです。頭のいい人がいて猫を殺してその肉を売っていました。大きい猫になるといい値で売れたんです。村には塩、芋（キャッサバ）、バナナなどを買いに行ったんですが、主人に見つかると殴られました。干飯（kerak）やこげ飯はこの位の大きさのものは5リングットから10リングットで売れました。

III 英国植民地時代のスキマン氏

日本軍が降伏した後、日本の兵隊は国に帰された。そして1946年7月にサバはイギリスの直轄植民地となった。ジャワからのロームシャはオランダ船でジャワに帰れるということになったが、行き先はジャワではなくパプア（イリアン）だという噂が流れ、乗船を見合わせたジャワ人が多かったという。ロームシャの一人カルディ氏（仮名）はこう語っている。

戦争が終わった45年、私はラブアンでオーストラリア人やイギリス人の下で倉庫の荷役作業をしていました。一日1リングットでした。ある日、オランダ人の船でインドネシアに帰れるということを知ったのですが、帰るところはジャワではなく、パプアだという噂を聞いて帰りたくなくなりました。それで「帰りたくない」といったら、飯は少ししかくれなくなりましたよ。

実際、あのときにオランダの船に乗ったジャワ人はイリアンに連れて行かれたのだ、と多くのジャワ人は語っていた。その後、英国植民地政府からは二度と帰国の用意はなされなかった。そのために今日でも多くの旧ロームシャがサバに居残る運命となったのである。

ところで、スキマン氏は英国植民地時代の自身の生活について次のように語った。

墓掘りの監督となる

私は子供のころ教育の大事さを全く判っていませんでした。しかし、ボルネオに来て戦争が終わってから教育の大事さに気がつきました。私はなぜ学校に行かなかったのかと後悔しました。もっと勉強していたらもっと頭がよくなっていたのにと悔やみました。私は小さいときアラビア文字だけはうまかったのです。というのは、村のイスラム礼拝所（ランガール）でコーランを読誦していたからです。読誦には行かなくてもよかったです、行けばなおよかったんです。たいていの親は行かせようとしていました。私の親も私が家でぶらぶらしているのを嫌いました。今の子供たちはみんなアラビア文字の読み方がもっとうまくなっています。

白人の時代になっても「私は字が書けないし、読めないから監督にはなれない」と辞退したんですが、事務所で「シストは3番、シノヨは4番というように番号が判って彼らの仕事ぶりを報告すればいい」というので命令に従ったんです。

マンドール〔墓穴掘りの監督〕にさせられたんです。私が監督だということ、3カ月間誰も知りませんでした。

[監督になる前] 私は病院の墓場係を命じられました。死人が出ると遺体を墓場まで運んで埋める仕事でした。死者が出ないときには、私はぶらぶらしているのが嫌なもんですから庭の花の世話などの仕事に精を出しました。それは命じられてやったのではなく、私の自発的な行いでした。あるとき軍曹に呼ばれました。そして「今からおまえを8人の部下に守られる監督にする。死人が出たときには4人が穴を掘り、残りの4人が遺体を担ぎ、おまえはただ指図するだけでよい」というのでした。しかし軍曹からそういう命令を受けてから3カ月間は誰も私が監督になったことを知りませんでした。私はみんなと一緒に仕事をしていまして、私が監督になったことを誰にも言わなかったからです。ところが、給料を受け取る時に私だけが他のみんなより多いことが判ってしまいました。それで、何でもスキマンだけが給料が多いのか文句を言い始めたのです。

私はアルファベットが読めませんでした。数字は判りました。朝の点呼のとき全員が番号順に並びますが、私はそれぞれの番号を覚えておいて一日の仕事が終わったあと上司には番号を指しながら、これは働いた、これは働かなかった、というように報告しました。

どの人も頭がよかったです。みんな数字が理解できたんです。なぜスキマンはいつも番号を見ているのかといぶかる人もいました。9人のうち5人は私より先にいましたし、大体同じ年齢でしたのでなぜ新入りが監督になるんだと怒る人もいました。だから殴られるかもしれないと思ってこわくて監督になったことを黙っていました。バンドン出身の男が監督になったことがありましたが、皆から嫌われ殴られて死んでしまったという話を聞いて怖くなりました。そこで、他の仕事に代えてくれと上司に頼みましたが、聞いてくれませんでした。

43年、45年、46年、戦争のあと、ああ、自分がアルファベットを読めないのを嘆きました。それでアラビア文字と比べながらアルファベットの発音の仕方を少しずつ覚えていきました。このアラビア文字とこのアルファベットが同じならこう発音するんだといった具合に、だんだんアルファベットを書けるようになり、読めるようになりました。

私は6カ月間、白人のところで働いていました。サンダカンでも6カ月働きました。そのあと、少しお金がたまってから食べ物を売る商売を始めました。繁盛すれば儲けも大きいと思ったからです。

植民地政府に嘘をついて食品販売許可証を取得する

1947年にトゥアラン [コタキナバルから北東方向30キロほどのところにある町] でソップ [ジャワの汁物料理「ソト」のこと] とサテを売る仕事を始めました。でもそこには1年もいませんでした。それからトゥレポック [トゥアランとコタキナバルの間にある町] に1年いて、そしてタンジュン・アル [コタキナバル市南西部] からピナンパン [コ

タキナバル市の南東部に隣接した町]に来ました。1948年、まだ結婚していなかった頃、私は一日18時間から20時間働いたもんです。やはりソップとサテを売っていました。ピナンパンのあと49年の終わり頃にクタキナバル——当時はアピ・アピとっていましたが——に移りました。

植民地政府は若い者に食品販売許可証 (lesen, surat kebenaran makan) を出さなかったのその頃のクタキナバルには30軒から40軒ほどしか食堂はありませんでした。タンジュン・アルには5,6軒しかありませんでした。

ゴム園はたくさんの人を必要としていました。私のような若い者は物売りをしてはいけなかったんです。しかし、私はうまくやったんです。物売りをするためにさっそく手紙を書きました。

「私は昔食べ物をつくる仕事をしていました。〇〇さんのところでボーイをしていました。今はもうそこで働きたくないのでサテを売りたいのです」。私はサテとだけ書いたんです。あれやこれや並べたてると許可が取れないだろうと考えたからです。「私の親はもう年老いているし、私には子供も学校に行っている弟もいるんです」。その頃私にはまだ妻はいなかったからこれは作り話ですよ。あとで親を連れてこいといわれるとは思っていませんでした。

警察官は私の手紙を読んで「ほう、なかなか結構」といって奥に入っていったんですが出てくると「だめ」と言いました。そこで私は上官に会わせてくれと頼みました。上官というのは白人の地区官 (D.O.) でした。私は彼の前に行ってさっきの手紙を渡して「ミスター」と言ってから「私には年老いた親がおり、息子がおり、弟がおります。だからサテを売って働かなければ食べていけないんです」と出任せに言った。

地区官は「主人というのは誰のことかね?」と訊いた。その頃サテ売りの親方はいなかったものですから「旦那です」とだけ言った。すると彼は「誰がこの手紙を書いたのかね。タイプを打ったのは誰かね」と尋ねてきた。

「すみません。兄弟が書いてくれたんです」

「その兄弟というのは誰かね。教えてくれんか」

私は嘘を言っているから嘘がばれたら許可はもらえないと思って考えました。そこで私は続けました。

「それを書いたのは兄弟です。その兄弟というのは、以前私と同じ家に住んでいた妻の兄です」

その当時、私には妻はいませんでした。しかしあとで妻になった女はもういました。実はその兄に頼んで書いてもらったんです。ですから結局、私は嘘をついていないんです。

「そうか。それじゃあ、親はどこにいるのかね?」

「はい、判りました。親を連れて参ります」

そこで私は一人の息子がいるジャワ人の年寄りを探しました。私はその年寄りを役所に連れていきました。

「旦那、これが私の親です」

その老婆は1918年にジャワから渡ってきた人でした。

「ああ、あんたには子供はいるのか？」と地方官は尋ねた。

「はい、旦那。この子は食べ物を売ろうというんです。それで許可証がほしいんです。サテを売ろうというんです」

「何でこの子はサテを売ろうというんだね。働き口はゴム園とか他にいくらでもあるじゃないか」

「ええ、この子はいろいろな仕事をしてきましたが、やっぱり食べ物を売る仕事が一番いいと言っています。天秤棒を担いであの村、この村と回って」

どうです？ 私は話を作るのうまいでしょう？ 私は誰かから入れ知恵されたわけじゃないんですよ。

私は許可証をもらいました。あちこちで食べ物を売る人は許可証がないのでびくびくしていました。そこで、私のたくさんの友達たちが許可証をもらいに行きましたが、誰ももらえませんでした。昔はサテは1本2.5センで、2本で5センでした。スープは一碗で20センでした。

幽霊屋敷を借りた

家を貸したいという人がいました。私は「空き家があるそうですが、それを借りられますか？」と尋ねました。

「借りられますかなんてもんじゃありませんよ。どうぞ。どうぞ」

「それはそれは。でも、何でそんな風におっしゃるんですか？」

「なぜかっていうんですか？ それはあの家には幽霊が出るからなんですよ。それでもいいですか？」

「ええ、結構ですよ。でも、それなら安くしてください」と私は言いました。

それで、私は安く家を借りることができました。私は家主の中国人に会って掛け合いました。

「あの家を借りたいんですけど」

「あんたは何人家族？」

「私一人ですよ」

「えーっ。一人で住むんだって？」

「私は食べ物売りです」

「どこで売ってるの？」

「あそこの店です」

「ああ、あそこね。そう。いいですよ」

「安くしておいてください」

「そうだね。30 リンギットにしておきますか」

こうして私は家一軒を30 リンギットで借りることができました。普通なら80 リンギットはしたところですよ。

その家はそれまでどの借家人も2, 3週間もすると出ていったんです。持ち主の中国人は借家人がなぜ出ていくのか知っていましたから、「金はいらぬ。庭の手入れをしてくれて、(家は傷むから) 住んでくれるだけでいいから」と私に言ったんですが、ただで住むというのでは近所の人に恥ずかしいので、せめて25 リンギットは払いたいと言ったんです。

幽霊はほんとうにいますよ。夜10時か11時に仕事から帰ってくると私はまず一階の台所に行きます。朝5時にはコタキナバルに出かけるのでその仕度をしなければならないからです。その支度が終わると2階に上がって寝ます。そうすると本当に人間が歩いているのが見えるんです。それで下に降りると台所のところにもいました。ええ、見えましたよ。そのとき親が言っていたことを思い出しました。金曜日の夜——西洋暦でいえば木曜日の夜ということになりますが——寝ないで戸口のところで「ヤシンの書」⁵⁾ を終りまで読みました。それを読むと幽霊は嫌がるからです。それで幽霊は怖くて出てきませんでした。必ず逃げ出すのです。

幽霊は影みたいなもので形があるものではありません。道化 (banyulan) の人みtainなものです。しかし歩いているのが見えるんです。本当にいますよ。私も妻も実在するのを知っています。妻は一人じゃいらぬんです。だからそういうときには妻は店か兄の家にいるんですよ。その2軒の家に近いんだけど幽霊はその家に出ないんですよ。他の家に移ることはないんです。

幽霊は蛇みtainなもので3カ月も姿を見せないこともあります。夜10時に帰ってきても見当たらないが、二階に昇るといふこともあります。見えないけれど肩のあたりに感じることもあります。もう一人の自分が後ろに立っているみtainなものです。夜、墓場に行くと感じるようなものとは違ふ。

幽霊は何か悪さをするわけではありません。あっちこっちを歩き回っているだけです。ジンというのは悪さをします。台所のところでガタガタさせて邪魔したり。私はそれをお

5) コーランの第27章。

ばけ (orang halus) といっています。ジャワにはトゥヨル (tuyol) がいるし、ジンもいる。イスラームのジン。ジンを飼っている人もいますね。ジャワ人は、トゥヨルに他人の金品を盗んでくるように命じて、金持ちの家に入れるのがうまい。は、は、は。そういう習慣を持っているジャワ人は多いですよ。今の若い人は邪術などは信じないから昔の人とは違いますね。

カダザンの娘と結婚

私は1949年、20歳の時に結婚しました。その前年の1948年、カダザン人が多いピナンパンにはジャワ料理の食堂は少ないものですから、条件はよいと判断して移り住んで、食堂の一角を借りてサテを売り始めたんです。たまたま私のサテ売りを手伝ってくれた家族がありました。その家族は手伝い賃を払おうとしても受け取ろうとしない良い人たちでした。そこで、その家族の、当時8歳くらいの娘を洗濯や掃除の手伝いに頼もうと母親に申し出ました。そうしたら、母親は「そんな小さい娘じゃなく大きいのがいるからそれにしたら」と言ったんです。それじゃあというので彼女を使うことにしたんです。

しばらくして私はコタキナバルに店を出すことにしました。朝5時に起き、9時頃にサテの仕込みをし終わると自転車でコタキナバルに向かうんです。帰りはいつも夜の10時か11時になり、寝るのは12時という毎日でした。そういう毎日の中で二人は恋し合う仲になりました。ですけれど、一所懸命に働いて金ができたらインドネシアに帰ってしまうのではないかと、彼女は心配しました。「豆は皮を捨てていく」けれど私を捨てないでほしいと彼女は言いました。私たちは結婚しました。

彼女はピナンパン生まれのカダザンです。彼女は子供が生まれる前から完全に私を信用していました。日々の収入は私が管理しましたが、彼女がそれをしようとしたことはありません。一体いくらのお金があるのかと尋ねたこともありません。68年のことでした。一人の借家人が妻に訊いたというんです。

「一日の収入はどのくらい？」

「知らないわ」

「結構あるみたいだけど」

「何でそんなこときくの？」

「あら、知らないでいいの？ 一日いくら、1カ月でいくらになるぐらいのこと知らなきゃだめよ」

「知らなくてもいいのよ」

「あんたの旦那、インドネシア人だって」

「そうよ」

「大丈夫?」、といった具合だということです。

私はまだマレーシア国籍を取得していません。⁶⁾ だから土地の所有は妻ということになっています。なぜ妻の名義にしているかということについては別の理由もあります。妻が私を完全に信用するためです。私は妻を本当に愛しています。本当に家族を大事にしています。その証として妻の名義にしているのです。私は、妻を手段として蓄財に努め、十分たまったらインドネシアに帰るということを考えているのではないということを示すためです。私はそのように見られたくありません。

異民族同士の結婚は互いに考え方が違うから離婚のケースもあります。しかし、人間というものは信心がなければいけません。名目だけの信者ではなくて本当に神の存在を信じている人間は妻を裏切ることはしません。必ず罰を受けることを知っているからです。妻だって同じことです。夫は妻に対して責任を持たなければいけません。妻が信心深くないとか、教育が欠けていればものごとをよく理解できるように教えなければいけないんです。時々、悪いことだと知りながら、悪いことを悪いことだと妻に教えない夫もいるが、それは誤解の元になります。信心の心をもって教育すれば必ず妻はよくなるものです。自分では判っていても妻を教育しなければ、妻は判らないままでいることになります。反対に、妻は判っていても夫を諭さない。たとえば、酒を飲んで酔っ払えば病気になると妻は知っていたとします。酒を飲むことは宗教で禁じられていることを知っていたとします。しかし、夫が酒を飲んでもそのことを教えない。それどころか、自分も一緒になって飲むなんて、これは間違いです。妻として夫のあるべき態度を守るようにしなければなりません。

キリスト教の日本人とイスラム教のインドネシア人が結婚したとしましょう。お互いに尊敬しなくてははいけません。お互いに教育し合わなければなりません。キリスト教の人は酒を飲んでいいのか悪いのか私は知らないが、日本人はよく飲むことを私は知っています。イスラムの人は酒を好みません。そこで、日本人の妻がイスラムの夫に諭されるとすれば日本人の妻は傷つくわけです。しかしイスラムの教えも教えなければなりません。キリスト教が酒を飲んで妻を殴ってもよいと教えているとは思えません。

今移民局があるところに私は店を持っていましたが、そこで間貸しもしていました。49年のことです。ドゥスン族でキリスト教の男が部屋を借りていました。その妻はまだ宗教がありませんでした。夫と同じドゥスン族でした。ある夜、私はその家族の部屋に行きました。夫、妻そして子供、みんな座っていました。

6) サバに残った多くのロームシャたちは既にマレーシア国籍を取得しているが、「対決」のときにインドネシア人協会の役職に在った人たちは今でも国籍を取得できないでいる。

「なんでさっきは喧嘩なんかしたんだね。真夜中だっていうのに。あっちこっちの間借り人に聞かれたらみっともないじゃないか。なんで喧嘩になったんだ」

「この人が酒なんか飲むからです」

キリスト教の人はよく酒を飲みます。昔は酒は安かった。大瓶で2リンギット半、小瓶で1リンギット半、いや、大瓶が1リンギット半で小瓶が80センだった。今は8リンギットか9リンギットだ。しかし昔は1カ月の収入はいくらだったか。一日で1リンギットか2リンギットでした。

その妻が言いました。「酒飲んで酔っ払うんです」

夫の方も何かを言い出そうとしたので、私はそれをさえぎって、
「ちょっと待て。俺が訊くから。それにしても夫と争うなんてよくないよ」と言ってから、まず妻の言い分を聞くことにしました。

妻はいいました。「この4カ月、給料を全部飲み代に使ってしまったんです」

「何だって？、おまえ、毎晩酒を飲んでるんだって。酒は宗教が禁じているんだぞ。酔っ払って女房を殴るなんて。おまえは損していることになるんだぞ。いくら祈ったって何の役にも立たないじゃないか。一日一本飲めば1カ月で何本になる？ 5本飲まなきゃマット一枚が買えるだろ。おまえのところには子供のマットがないじゃないか。3本飲まなきゃ子供に枕を買ってやれるだろ。いつか子供が学校に行くようになったらどうするつもりだ。本も買えないじゃないか。男には責任があるんだぞ。おまえの給料は月30リンギットだとか。飲むならお茶かコーヒーにしろ。そうしたくないというんならここを出て行ってくれ。俺は恥ずかしい。こんな屑みたいな奴を置いておくなんて。俺は、自分の子供と思うような人間じゃなきゃ住んでもらいたくないよ」

今の移民局のところにあった店は月70リンギットで借りましたが、1951年に買い取りました。コタキナバルに店を出すとき、現在アジア・ホテルの所有者になっている店主（中国人）が飲み物を売り、私が食べ物を買ったんです。その時、その店主に許可証はあるかと訊かれたので許可証をとろうと思ったんです。

インドネシア人協会を作る

スキマン氏はサバに住むインドネシア人の安寧と発展を考え、同志たちと協力して「ジェッセルトン・インドネシア協会 (Persatuan Indonesia Jesselton)」を組織した。ジェッセルトンというのはアピ・アピと並ぶコタキナバルの旧称である。

私は、まず第一に自分の子供を教育するのが大事であるのと同じで、他の民族を導くよりも先に自分の民族を導く必要があると考えました。自分が正しい道を歩けるようになれ

ば他の人にも教えられます。自分が正しくなくてどうして他人を正すことができますでしょうか。他人が受け付けるはずはないでしょう。

英国の植民地時代にはまだ協会はありませんでした。中国人たちのなかにも協会に似たような組織はありましたが、まだ小さいものでした。1957年や58年当時のインドネシア独立記念日には中国人会の会長がきたもので、彼は「あんたはもうこんなにたくさんの会員を集めたインドネシア人会を作っているのか」と驚いていたものです。

1960年に協会の憲章を作りました。それ以前には協会のようなものではなくて、インドネシアから賓客が来ると、植民地政府は私を呼びつけて、何を買い、どんな料理を作るかを尋ね、それを用意する仕事を任されたものでした。そうした経験を積むうちにこのサバでインドネシア人が発展するにはどうしたらよいか、そのためには政府の許可を得た会を作った方がいいのではないかと思うようになったんです。単なる仲間の集まりの会ではしっかりしたものにならないと考えました。そこで会則を作りました。それは政治団体ではなく、社交団体でした。

1946年にラブアンでスラットマディとスプラプトの兄弟⁷⁾がインドネシア人労働組合(Persatuan Kaum Buruh Indonesia)を作ったんですが、そのとき私は社会部を担当しました。スラットマディ兄弟は日本時代にラブアンに来ましたが、当時で30歳位でした。あの人たちは56年か57年に帰国しました。46年にブルネイやサバにいたインドネシア人の全てがラブアンに集められました。7,8千人もいたと聞いています。46年の最初のインドネシア独立記念日はラブアンで迎え、右にユニオン・ジャック、左にインドネシア国旗を立てました。第二回目と第三回目はクタキナバルで行いました。スラットマディ兄弟が帰国したあとは私が旗を立てる役になりました。独立記念日はジェッセルトン・ホテルで行いました。私は協会を政府に認めてもらうために公式の文書を書きました。61年に協会は認められ、私の食堂でそれを祝いました。

なぜ文章もうまく書けない私が協会の会長に選ばれたのか不思議ですね。サルジャナ・ムダ[大学卒程度の学位]もいたのにたくさんの人が私を推したんです。それは、私が白人[英国人]に対して物怖じしなかったからだったんです。他の人達は怖がってしまうんです。なぜ物怖じしなかったかという、それは、もし物怖じしていたら何もできないからです。本当は内心怖かったんですが、怖がっていたら協会ができないと思ったからです。白人はたくさんいました。彼らはマレー語がうまかったからマレー語で話しました。

会を作って初めて援助を求めることができるというもんです。たとえば独立記念日かイ

7) Ali Umry Nasutionによればこの二人の兄弟はジャワの貴族の称号であるラデン(Raden)を持っていたという[Ali Umry Nasution 1990: 36]。

インドネシアから賓客が来たとかで10人が集まったとします。そのために料理を用意しなければならない。しかしお金がない。そんなときにはまずお金を作ることです。そして人々がそれを知ったときに彼らに援助を求めることができるんです。これはインドネシア人に向かっての話で、ほかの民族の人達には要求できません。ありがたいことに少しずつ集まってようやく借金を返せるわけです。ただどいつも十分な金が集まるというわけではありません。私の持ち出しということもあります。私の店で会合を持ったときなどは、ときどき、いや、いつも食べ物や飲み物は私の負担でした。

妻も協力的でした。「対決(コンフロンタシ)」⁸⁾のあと、1968年に初めてスパルノ領事が在コタキナバル・インドネシア領事館に就任しました。初代の領事はムントロ氏で1962年の就任でした。スパルノ氏は2代目です。たくさんのインドネシア人が領事公邸に集まりました。妻は婦人たちの世話をしました。

その当時、子供たちを学校にやらなければならないし、家計は火の車で、その日に入った金は次の日には消えてしまうというありさまでした。ただ経営はそれほど厳しいというわけではありませんでした。「神はもっと金持ち」といいます。神は人間よりよく知っています。だから神は幸福を与えることができるのです。私は喜んでその幸福を追い求めます。私はそれを確信しています。自分を社会のために犠牲にした者を神は知り、その者に報いを与えるということです。それはイスラムの教えで、私が親から教わったものではありません。私の親はそんなことを教えられるような親ではありませんでした。そういうことはこちらに来てから学びました。

サバに住んでいるジャワ人は始めのうちは同じような境遇にいましたが、いつの間にか差が出てしまいました。その差は独身の若いうちから出ていました。独身であってもいざれ結婚し、結婚すれば子供も生まれます。そうなれば自分の家も必要になるし、教育のことも考えなければならないでしょう。そのために金をためようとしなければいけない。

しかし、そうした者もいればそうしなかった者もいました。私は協会ですべて言っていました。年寄り世代には間違っただけが多い。しかしこれからの若い者は決してそれを繰り返してはならない。

第一に、自分の将来を私たち老人はあまり考えなかったけれど、考えなければならない。頭のいい人はよく考えました。だから、今、楽をしています。もちろん、豪勢という

8) 1963年9月16日に予定されていたマレーシア連邦独立に対してスカルノ政権下にあったインドネシアはこれを承認せず、63年1月から外交関係の断絶やインドネシア軍のサバ・サラワク侵入などを展開した事件。この紛争は1965年のインドネシア政変などもあり、スハルトが実権を握った66年5月まで続いた。その間、サバ在住の多くのインドネシア人は嫌疑を受け、当局の取り調べを受け、投獄された。

には程遠く、質素な生活ではありますが、楽をしています。もう何十年もここに住んでいるのに家は借家というのでは困ります。

第二に、彼らは博打が好きでした。昔、ゴム園で働いていた独身時代に、ゴム園を経営していた白人たちは賭博場を開帳すればジャワ人労働者を縛りつけられると考えました。月に2回でした。博打で金を使い果たせば前貸しするんです。ですから月末にどれだけのお金が手元に入ることでしょう。たとえ1カ月の給料が100リンギットだったとしても、50リンギットを前借りしていれば50リンギットしか手に入らない。みんな博打をやりました。白人経営者が大きな建物を建てて賭博場にしました。そういう賭博場はどのゴム園にもありました。1917年、18年、20年にジャワからやってきた人達⁹⁾はみんな博打が好きで、生活は貧窮の極みでした。おじいさんたちがここで博打をやれば、その息子たちがその向こうで、そして孫たちもその向こうで博打をやるというありさまで、驚いたものです。

フィリピンやインドネシアから外交代表団がやってきたことがありました。私はインドネシア領事に訊いたものです。

「領事は何日ここに滞在されますか？」

「三日の予定ですよ」

「三日ですか。それではゴム園にご案内いたします。といいますのは、サバのゴム園ではインドネシア人、その多くはジャワ人ですが、その人たちが月に2回白人のところで博打をします。そこで、領事が帰国されたら、サバのインドネシア人たちはよく博打をしていることをですね、それも、こっちでは老人たち、あっちではその息子たち、そしてその向こうでは孫たちが熱中している様子を是非知らせて欲しいんです」

私は、こんなことでは将来、ここにいるインドネシア人の子供たちにどんな結果をもたらすことか、とても心配でした。子供や孫は何としてでも学校にやらなければいけないと思いました。17、18、20年にやってきた人達はとにかくめっちゃくちゃでした。終戦後、ラブアンからラバウのゴム園にやってきたインドネシア人たちは、前からいたたくさんのジャワ人たちが、ただゴムの樹液を取る仕事だけで空き地に何を植えるでもない生活で、何かを請け負って少しでも足しにするでもない、ただ頭にあるのは博打のことだけという生活ぶりを見て驚いたもんです。そんな調子ですから、かりに何かを頼まれてもどうしてよいか判らない。将来に向けてどうしたらよいかなど考えも及ばなかったわけです。

ところが、54年にラブアンからやってきたジャワ人は3時にゴム園の仕事が終わると鍬

9) 1917年、18年、20年にやってきたジャワ人というのは北ボルネオ特許会社がゴム園の契約労働者として雇用したジャワ人たちのことである。太平洋戦争直前の1941年に北ボルネオ保護領政府が発行した報告書には1914年以降41年までの年毎のジャワ人労働者の死亡者数、帰国者数、定住者数、再契約者数などが詳細に記録されている。

をもって空き地を耕しました。だから半年もするとたくさんの作物を手にすることができました。しかし前からいたインドネシア人たちは10年経とうと20年経とうとまったくお金は残りませんでした。違いはそんなものでした。

1942年にやってきたジャワ人の中にも博打にとりつかれた者もいて困ったものでした。他人の話や忠告に耳を傾ける人々とはまったく別でした。私はいろいろな人に忠告してきました。私の忠告に耳を傾げる人もいましたが、傾けない人もいました。

60年に私が音頭をとって来た協会が61年に植民地政府から許可を得たとき、ジャワ人、ブギス人、ブトン人、ティモール人など民族ごとに組をつくり、組長を選びました。そうする目的を私は説明しました。それは、ティモール人はティモール人自身を守らなければならない。ブギス人はブギス人自身を守らなければならない。人間というものはほんとうは良いのであって、よく働く人間にならなければならない、そのために民族単位で助け合っていかなければならない。それが私の目指したものでした。ジャワ人はもちろんです。

ですから、通りかかった人がジャワ人だと判るとよく見てから「お茶でも飲んで行かないか」と誘いをかけて「どこに住んでいるの?」とか「仕事はあるのか?」などと訊いたものです。それに対して「いいえ、ないんです」などという答えが返ってきたら「何で仕事がないの。私たちはどんな仕事でもしなきゃいけない。仕事を選んじゃいけないよ、金がないんなら。何もしないでぶらぶらしていたらこの人たちに恥ずかしいじゃありませんか」

あちこちに泥をつけたままの格好でコタキナバルの町に野菜なんぞを運んで来てちょっと一休みしている人がいたりすると言うんですよ。「土地があるんなら木を植えなさいよ。それで食っていけるでしょ」。要するに、私と同じ民族の人間が私の店にやってきて1時間もそれ以上も座ったままぼーっとしてお茶をすすっているのを見るのがたまらなく嫌なんです。そういう人を見ると私は注意しないと気が済まないんです。

しかし、ジャワ人ではないインドネシア人となるとそう簡単にはいきません。ジャワ人だとたいていは私の言うことに耳を傾けます。

昔、税関の荷役作業をしていたジャワ人がたくさんいました。そのなかの一人がカンボン・アイール [コタキナバル市内の一地区。水上家屋があった] に一軒の家を借りていました。カンボン・アイールはその当時、まだ海でした。今はたくさん家が建っていますが。その男がやってきて言いました。

「スキマンさん、私の給料はいつも食べるだけでなくなってしまうんです。家賃も払えない状態で、どうしたらいいと思いますか?」

「おまえはまだ独身だが、いつか妻子ができたらどうする? もしおまえのつれあいが頭がよければいいだろう。だけど、そうではなかったらどうする? この(植民地)政府は土

地を耕したいと思う者には土地を与えと言ってるよ。その土地に野菜でも植えて大きくなったら10束、20束、30束とまとめて売ったらどうかね」

そんな忠告を聞いてそれを実行に移した者もいました。私の忠告を聞いてコーヒーやココヤシを植えて金持ちになった人もいます。1950年代の話です。

ムル氏〔後述〕は協会に入ろうともしませんでした。祝日などに領事館で開かれる集まりに来ようとしらない人は他人の考えが判りません。なぜ領事館の独立記念日の集まりにこないのか。食事もでるというのに。「忙しい。忙しい」と人は言います。そういう人に私はこう言い返すのです。「一年に一回のことじゃあないか。『忙しい』などというのは理由にならない。役所勤めなら2、3時間の休みを取ったらいい。自分の個人的なことを優先するのか。もうマレーシア国籍をとったから、自分の民族を忘れたのか。もったいない。あんたはいいかもしれない。しかし子供も孫も損することにならないかね」

協会は絶対に必要だと思うのです。マレーシア政府の許可を得て協会ができて、もし私に引っ込めというなら役職を退いて平会員になってもいいんです。ただ親が馬鹿なら孫子も馬鹿というのだけは望まないということです。

経済の分野では協会を利用したにせよそうでなかったにせよ中国人の場合に比べるとジャワ人との差は大きいんです。50年代、60年代そして今日、彼らには資本があります。彼らの場合、貧しければ金持ちから借金できる。そういう援助で彼らは発展することができたんです。そこへいくとインドネシア人の場合は違う。たとえばあるインドネシア人が経済の発展を望んだとします。そこで牛を飼ったり、食べ物の販売を始めようとします。しかしどこから元手を手に入れるのか。結局、資本がないので考えだけで終わってしまうんです。

中国人の場合には考えだけで終わることはありません。実現するのです。なぜかという、たとえば近所を見ると皆金持ちです。「よし、あそこに金を借りに行こう」。借り手が過去何の失敗もなければなおさらのことです。「よし、あそこで金を借りよう」。借金して小さな商売を始めてやがて大きくする。大きくなったらまた借金をしてもっと大きくする。

ところが、この人は違う。政府からだろうが友人だろうが金を借りるとすぐになくなってしまいます。そんなことがここではたくさんある。そんなことで政府は国民を信用できるだろうか。たとえば、古いゴムの木を切り倒して若木を植えるように政府が農民に土地を与え、金も貸したとします。しかしその金は他のことに使ってしまうんです。牛や鶏を買うのに使ったり、魚を育てるのに使ってしまうんです。

そういう〔この〕人たちに比べると、インドネシア人の中には不正直な人がいて、気を付けなければならないんですよ。私にも経験があります。65年のことでした。一人の友

人がいました。彼はムサポルのゴム園からやってきました。彼は、
「私もコタキナバルに住んでスキマンさんのように食べ物を売る商売をしたいんです」
「ああ、そう」
「私はもう給料生活が嫌になったんですよ。スキマンさんのように物を売って生きたいんです」
「そう、それで元手はあるんですか」
「ええ、それなんです、ないんです」
「だけど、ほんとうに物売りをしたいの？」
「ええ、ほんとうです」
「それならば、まず許可証が必要です。売るための許可証ですよ。次に売り場を探さなければならぬが、それは私の店でいいとして、三番目に食器入れなどを揃えなければならぬが、これも私のところで揃えてやろう。四番目は売り場の保証だが、これも私がしてやろう。第五番目は材料を仕入れなければならぬが、お金がないというのなら私が貸してやろう」

3カ月もすると売れ行きもだいぶ良くなってきたように見えたので私は言った。
「貸した金はもうだいぶになるが、まあそれはそれとして、別のことなんだが、もう4カ月ここに住んでいるけれどランプ代も水道代もただでやってきた。売れ行きもよくなってきたようだから、どうかね、部屋代だけでも払ってほしいんだけどな」。すると「ちょっと考えさせてください」と彼は言いました。この男は協会に入っていない世間知らずの男でした。
「あとで妻と相談しますので」
「何をいってんの。違うんじゃないの。奥さんに相談するようなことじゃないでしょ。奥さんは当然『それで1カ月いくら?』ときくでしょうよ」
「はい、判りました」と言ったものの、妻に事情を説明するから待ってくれというのです。私はもうこりゃあ普通ではないなと思いました。
「あの一。私の間違いでなければ、私はランプを借りたわけではなかったんです」と彼は言いました。あーあ、この人は一体何を言ってるんだろうと思いました。

その夜、夫婦はスンプラン [コタキナバルの一地区] に引っ越してしまいました。私の家はまだサリ・ホテルの近くにありました。

それから4カ月たって私のところから遠くないところで彼らは食べ物売りを始めました。そうこうするうち、彼は役所に出かけて行って、
「私はムサポル・ゴム園からコタキナバルにやってきてからスキマンさんのところで働きました。そこでは4カ月働きました。月給は私が150リンギットで妻が100リンギットです。なので合わせて250リンギットのはずでした。私たちは毎朝2時に起きて仕込みを始める

毎日でしたが、4カ月たってもスキマンさんは給料を払ってくれませんでした。仕方がないので私はそこを辞めたんです」と言って訴えたんです。

私は役所に呼び出されました。旦那たちがたくさんいました。

「おまえがスキマンか？」

「はい、そうです。旦那」

「わしはおまえのところで食ったことがあるぞ」

「はあ、どういうことで？」

「わしには判っておる。嘘をいっても騙されはせんぞ」

「おまえを訴えておるのがいる。その男は前におまえのところに住んでおったというのが本当か」

「本当ですが。それがどうかしましたか？」

「その男は4カ月間おまえの手伝いをしたというが、まだ給料を払っていないといっておる、妻の分もな」

「誰が給料を払うんです？旦那。この男は何も判っていない阿呆ですよ。間違いです。この男は我利我利亡者です。この男は私の家に住んでいながら一センも払わないで出ていったんですよ。なんでこの男が私から給料をもらうんです？この男は自分で作った料理を売るために私のところにいたんですよ。元手は私が出してやったんですよ、旦那。陳列棚を作ってやったとき誰が金を出したか大工に電話してきてみてくださいよ。もし旦那がどうしても信用できないというんなら」

「そうか。スキマンが言っていることはほんとうか？」

「とんでもない。うそばかりです」

「よろしい。うそだというんなら証拠を見せようじゃないか」

翌日、私は証拠を持って行きました。

「失礼します。証拠を持ってきました。もしあの男が私のところに住み込みの給料取りだというんでしたらなぜ私にこういう借金があるんですか。これは4カ月分の間借り賃の請求書です。これを出したらこの男は出て行っちゃったんですよ。これは店の場所代の請求書、これは物品代の請求書です」

「ほう。『○月○日木炭代未払い』。『×月×日木炭代未払い』。『○月○日ソバ代未払い』。ほう、これではスキマンの手伝いとはいえないな」

「それはうそです」

「よし。おまえがうそだというんなら裁判所へ行こう。そうすればもっとはっきり決着がつかうよ」

こういう人は本当に困ったもんです。将来はどうなることやら。

やがてその男はケニンガウ [コタキナバルの南方 100 キロほどのところにある地域] でたくさんの牛を飼い、たくさんの土地をもつようになりましたが、養子に「サバ・イスラム協議会」¹⁰⁾ に訴えられ、2年間、獄中生活を送ることになりました。2年たって戻ってくるともう土地も金もなくなっていました。それでサンダカンに行ってしまう。サンダカンで何をしているやらどこに住んでいるやら判りません。哀れな末路というしかありませんが、それもあの男が犯した罪の報いです。

あるジャワ人夫婦がいました。夫は働いていましたが、妻には職がありませんでした。子供はいなかったし、夫の収入だけでは十分ではないように見え、気になっていました。そこで、

「どうしてあんたの奥さんは働かないの?」と訊きました。

「そうなんです。妻は働きたがっているんですが、元手がなくて」

「何か特技でもないの? 何か商売の」

「ええ、金を売る商売ならできるんですが」

「ほう、そうかい。もしおまえがいい人間なら 1,000 リンギットぐらいの元手を貸してやってもいいぞ。うまく売ればもっと貸してやってもいいよ」彼は独身でなく、妻がいるので信用できました。

この土地の人でダトゥ [Datu, 称号] の位を持つ人が 5 万リンギットを貸すから店を大きくしないかといってくれたことがあります。利子は月に 50 リンギットでいいということでした。そのことを妻に話すと、妻は「やめてください」と言いました。なぜかと訊くと、「なんであなたは店を大きくしようというの。今のままで十分よ。この小さな店でさえ 5 人も人を雇っているのよ。ここでは人を探すのは大変だってこと、あなただってよく知っているでしょ。インドネシア人あるいはジャワ人なら別だけど。肉を切るんだって料理の仕方を教えるんだって本当に覚えが悪いし、ようやくうまくなったかと思ったら、店を辞めると言い出す。それに、田舎の田植えをしなければならぬから 1 カ月の休みをくれだの、帰ってきてしばらくするとまた草刈りがあるからとか何だとかいって。一体、ずっと働いてくれるいい人をどこから連れてくるつもり? 2 カ月たったら一人、3 カ月たったらまた一人と代わる代わる雇うなんてほんとに気が滅入っちゃうわ。結局、私が懸命に働かなければどうにもならなくなるわけ。私たちだけで十分だわ」。

10) Majilis Ugama Islam Sabah (MUIS) または Majilis Agama Islam Sabah (MAIS) で、ムヒッディン・ユシンによれば、イスラーム教育、断食月の終わりのザカッド (喜捨) の収集と分配、メッカ巡礼やモスクに関する事柄などを監督する協議会となっているが、裁判所のような機能も持っているようである [Muhiddin Yusin 1990: 82-86]。

IV ポモー（呪医）について

子供が病気になっても病院に連れて行かずにポモーのところに連れていく人がいました。しかし治らないので病院に連れていくように言ってやったことがあります。医者には、「ポモーのところに連れて行ったけれど治らないのでなどとはいうな」と言ってやりました。病院の診察料が高いから病院に行かないのではないのです。病院は1リンギットか2リンギットで済むんですから。

私は、ポモーに診てもらいたいと思っている人がいたら、そのポモーは何という人なんだ、と聞きます。うまいポモーだ、というんならちゃんと前もって約束してから診てもらえ、と注意します。「もしあんたに病気を治せたら金を請求してもよい。もし良くなったらいくらいくらほしいといってよい」と。これは必ず言わなくちゃいけない。そうしないとたくさんの金を要求されるぞ、と言ってやりました。

薬を使うポモーに診てもらった人がいました。そのポモーは5種類も6種類も薬を出してくれます。全部で20リンギットと言いました。そんな調子で5回も行ったら一体いくらになりますか。私だったら2回診てもらって治らなかつたらもう二度とそこにはいきません。

V イスラーム信仰について

彼の信仰については既に触れてきたところであるが、サバに住んでいる別のジャワ人（ムル氏）の信仰についての彼の見解を紹介しておこう。ムル氏は筆者に次のように語った。

私は今75歳です。人間というものは、ジャワ人の考えでは、誰もが同じというわけではありません。「学（elmu）」を持っている者と無い者では違います。「学」のある者は長く耐えられるのです。つまり寿命を延ばすことができるんです。「学」の無い者は70歳まで生きられない。人によっては50歳で死ぬこともあるんですよ。なぜかというとなんも学んでいないからです。学ぶということは、鋤を使って耕し、植物を植えることと同じで、亡くなった祖先の霊と交わることで、そうすれば寿命を延ばすことができるんです。

「祖先の霊と交わることで……寿命を延ばすことができる」という彼の言葉を筆者は祖先の霊に向かって長寿を祈願すると解釈した。というのは、そうした信仰がジャワにはあるからである。たとえば筆者が調査したヨクヤカルタ特別区のある農村では次のような祈りの言葉が父親の墓の前で唱えられていた。「あなた（父）の御霊が生前になされた善行にふさわしく、ア

ラーの御前に招かれますように。この世に残されたあなたの子供と孫に祝福をお与えください。どうか家族一同に強い信仰と十分な衣食をお与えください。そして健康と平和をお与えください。この世にいるあなたの子供と孫がいつも幸せで平穏な生活を送れますように」[染谷1993：188]

このようなムル氏の信仰に対してスキマン氏は次のように述べた。「祖父はまだ生きているときにこそ、孫を教育したり、長生きできるように教えられるものです。一緒に長生きできるように祈ったりもします。しかし死んでしまえばもう孫のために何もできない。孫にできることといえば祖父が神に受け入れられ、天国に迎えられるように祈ることぐらいです。祖父がよいところに迎えられように祈ることはよろしい。しかし、祖父に年齢を延ばしてくれと頼むのはよろしくない。それでは多神教 (syirik) になってしまう。つまり彼は神を信じていないことになる。彼は神に寿命を延ばしてほしいとか、何かを望んでよい。しかし死んだ祖父に望むのは間違っている。これは私の考えです」。

(ジャワでは墓石に手を合わせ、死者に願い事を神に取り次いでもらう習慣があるがそれについてどうお考えかという筆者の質問に対して)「墓で祈るのは死者が神に受け入れられること、生前に犯した罪が許され、拷問の罰に会わないように、そして神からよき場所を与えられるためです。もし彼がイマームを礼拝すれば祈りは神に届きます。イマームに礼拝をしなければ祈りは神に届きません。もし祖父の霊に寿命を延ばしてほしいなどと願うとしたらそれは神を信じているとはいえない。神は怒るだろう」。そして「ムルはイスラーム信仰が弱い人だ」とつけ加えた。¹¹⁾

11) ムル氏は先の言葉に加えてさらに次のように語った。「ジャワ人にとって若い頃はたくさん学ぶことがあるんです。何を学ぶかという、『学』です。楽しいことといえばそれは『学』です。寿命を延ばすんです。何のための『学』ですか。それは聖なる道のためです。それは他人のものを盗むような行いとは違えます。『学』があれば他人のものを盗めなくなるのです。『学』があれば盗むなどということ望まなくなるからです。『学』があれば富や衣食をたやすく得られます。寿命を延ばすことができます。全能の神によって。この教えは私がまだジャワにいた頃に祖父から教えてもらったものです。私は毎朝4時にこういう祈りを唱えます。それはこうですよ。『ビスミラー・ロフマニ・ロヒム (慈愛ふかく慈愛あまねきアラーの御名において)。我が母、兄姉と弟妹たち、神の喜びと平和あれ。アラーの他に神はなし。モハンマドは預言者。これは祖父のため、これは兄弟のため、おのおのがその始源と神に従うゆえに。今日にいたるまであなた (祖父) が送ってくれた導きを忘れません。道をきわめるべしというあなたの教えを忘れません。丈夫で長生きできるようお願いしなさいとあなたは教えてくださいました。いと高く絶大なる神に感謝』。そして右、左、真ん中の順に息を吐くんです」。

これからすると彼は必ずしも祖父に向かって長寿を祈願しているわけではない。むしろ祖父 (の教え) を仲立ちとして神に祈願していると解釈できる。「亡くなった祖先の霊と交わる」ということを〈祖父 (の教え) を思い起こすこと〉と解釈すれば、長寿祈願はむしろ神に向かってしているということになる。そうだとすれば亡き祖父の霊に向かって長寿を祈願していたとする筆者の解釈は間違いということになる。とはいえ、祖霊に祈願するという信仰がジャワにある事実は動かないし、それがムル氏のいう「祖先の霊と交わる」ということと同義であるという解釈も依然として可能であり、ここではスキマン氏の批判の通り、ムル氏の信仰は多神教としておこう。

考 察

スキマン氏は生まれつき利発で行動的な人だったと思われるが、ジャワ海域世界特有のイスラーム的・企業家的文化¹²⁾が少年時代の彼をさらに篤信で勤勉な人物に育て上げたと考えられる。

彼の精神を形づくった最も大きな要素がイスラーム信仰であったことは疑いをいれない。そのことは、借家の幽霊を「ヤシンの書」を読んで遠ざけたり、異民族同士の結婚における心構えや酒に溺れたカダザンの男を説得した場面、あるいはボモーに関する見解などに明らかであろう。さらに、7歳になる彼の孫がコーラン読誦では近所の子供たちの中でもリーダー格になっている事実もつけ加えておこう。いうまでもなく、それは彼の指導の結果である。なお、墓石の前で手を合わせ、願い事を神に取り次いでくれるよう祖霊に懇願する信仰は少なくともヨクヤカルタ地方などに存在する。彼はそれを瀆神的行為だと断定するが、山域世界と海域世界の文化的相違を見るように思う。彼が信仰の弱い人といったムル氏もヨクヤカルタ地方の出身であった。

ここでいう山域世界とはヨクヤカルタやソロ（ならびに東部ジャワのクディリやマランなどを含めてもよい）など山岳で囲まれた、古来より水田耕作を基盤に栄えた諸王国の地域である。これらの王国はスメル山を中心に置くヒンドゥー・仏教的宇宙観のもとに形成された。筆者はジャワの諸王国が（デマックなどの海域国家を除いて）基本的に内陸の山岳地帯に興ったのは、シャイレンドラ（山の王）という王国の名称が象徴するように、山を志向する宇宙観によるものではないかと考える。土屋は「なぜ16世紀くらいにジャワの政治的経済的中心がジャワ北岸の港から再び内陸に戻ってくる」[田中他 1993：482]のかがわからないと疑問を呈しているが、根強いヒンドゥー・仏教的宇宙観が遷都の理由の一つであったと考えられないだろうか。もちろんデ・フラーフとピジョーが指摘したように、北海岸の交易国家間の争い、ポルトガルの進出、あるいは内陸の山岳が防衛上有利であったなどの現実的な理由もあった [De Graaf and Pigeaud TH. 1985：302-303]。¹³⁾

ジャワの山域国家は土屋のいう「荒ぶる海」[田中他 1993：482]を南に配置し、他の方角に山岳を置く地域で成立した。この山域国家はジャワ海の彼方から北海岸を經由して入ってくる仏教・ヒンドゥー教・イスラム教などを伴った大文明を集積し、混交し、独特の文明へと練磨した。それは東南アジア文化の一つの高嶺となった。その高みからその文明はジャワの他の

12) Feith, H. [1962: 30-32], レッグ [1984: 194] を参照。

13) 海域世界と山域世界についての詳細は染谷 [1995] を参照されたい。

地域へと溢れ出た。否、ジャワだけではない。今やインドネシアの他の地域はもちろんマレーシアにも及んでいるのである。

スキマン氏は合理精神の持ち主でもあった。実害を引き起こさない幽霊だとはいえ、彼には幽霊屋敷を借りる勇気があった。彼は安い家賃で家を借りようとしたのであるから「合利」精神も持っていたといえる。ここでは企業家的海域世界の間人としての強みを発揮したといえよう。冷静に物事を観察し、理（ことわり）を明確に把握する彼の合理精神は日本の軍人に仕えたときにも発揮された。彼は日本の「やりかた（アダット）」を見抜き、あまり殴られずに済んだと言っている。おそらくこうした態度はイギリス人や中国人あるいはカダザン人に対しても発揮されたにちがいない。中国人会の会長との交際あるいは飲み物を売っていた商売仲間の中国人店主（この人物はのちにホテルの所有者となった）の忠告に従って「食品販売許可証」を取得した話、（借金で事業を起こし、拡大していく）中国人企業家の行動様式に関する彼の見解そして現地人つまりカダザン人のでたらめな経済行動に関する彼の見解などにもそれをうかがうことができる。彼においてはイスラーム信仰と合理精神は矛盾することなく併存している。

マレーシアという外国の中で、しかも文化的にはかなり異なるカダザンの人々が多い地域の中で、インドネシア人あるいはジャワ人という異邦人としてしかも少数者として共生するには自己管理が不可欠である。彼は「恥ずかしい」という言葉をよく使う。現地人にどう見られているかは彼が最も気を付けてきたことの一つであった。彼は協会を作ることによって集团的に自己を管理するとともに、その協会が何ら政治性を持つものではないことを強調し、インドネシアとマレーシアの微妙な関係に配慮してきた。協会の創立と維持運営にあたっての彼の献身的な努力は、その日暮らしの域を出ようとしないうインドネシア人の仲間や博打で身を持ち崩している仲間を救済するためだけではなく、異なった文化の所有者と共生していくためでもあったのである。他者への配慮（ジャワ語で *tepa slira* という）を怠らず、いざこざを好まないジャワ文化の一側面を表現しているといえる。

彼は日本軍による強制を志願へと転換した。そうすることで自らのうちに自発性と積極性を確保し、墓掘りの監督を任命されたことが示すように、前進の可能性を残した。彼は、抗いがたい強制のもとで主体性を確保し、限られた範囲とはいえ自由で前向きに生きようとしたたたかな知恵、逆境を順境に転換した知恵を発揮したのである。彼はまた、（ゴム園に駆り立てる）植民地政府からの反人道的強制に対して（老人や児童という弱者を抱えた）家族からの人道的強制を対置し、支配者に向かって後者の優位性を迫ったのであった。すでに植民地主義の反人間性が暴露されていた1949年頃のことであるから時代背景が彼に有利に働いたことはいうまでもない。彼は植民地主義の権力と戦い、勝ったのだといってよい。なぜなら自らの自由を確保し、ここでも前進の可能性を残したからである。逆境を順境に転換したもう一つの例である。

ジャワ人の人類学者ラクソノによれば、ジャワ人は、東に対して西というように常に異なったものとの対比でものを見ている、という [Laksono 1985: 70; 1986: 65]。異なったものとの対比でものを見るのは人間の認識の基本であるからとりわけジャワ人だけの特徴とはいえないが、意識レベルに近いところで常にそうした認識方法をとっているのであれば、¹⁴⁾ 強制に対して志願を、権力による強制に対して家族による強制を対置することは難しくはないのだろう。

「成功の秘訣は何でしょうか」という筆者の質問に対して彼は、第一に、神に全てをゆだねること、第二に、正しいと確信したら敢然と行動すること、第三に前進のために戦うことだと言った。彼の人生がこうした信条に沿ったものであったことは明らかであろう。

おわりに

恥をかかないように行動し、仲間を導いてきた彼の目に、強制連行や給与未払いを忘れたかのように振る舞う日本政府と日本人はどのように映っているのであろうか。彼らがかつて、否、今でも「日本に捨てられたごみ (Sampah Jepun)」と現地人に蔑まれている事実を日本政府も日本人もどう受けとめたらよいのだろうか。筆者がコタキナバルに滞在中、彼らは在コタキナバル日本領事館を訪れ、補償要求を行った。領事は、日本政府が賠償金を払ったことですでに国家間の補償は終わっているという公式見解を述べた。彼らは「しかし私たちは何も受け取っていない」と述べ、不満を表明したが、会見はそれで終わった。領事は最後に彼らの来訪があったことだけは本省に報告すると約束した。しかし、残念なことに、その約束が果たされていないことを筆者は後日確認した。

紙幅の関係でスキマン氏のスカルノ観や旧秩序と新秩序に対する彼の興味深い見解、そしてスキマン氏以外のジャワ人のライフ・ヒストリーを扱うことができなかった。いずれ別稿でとりあげたい。

追記

本稿で取り扱った資料は平成3年度日本学術振興会東南アジア学術交流事業（研究課題：マレーシアにおける社会経済変動と文化変容）および平成4・5年度文部省科学研究費補助金（国際学術研究）（研究課題：ボルネオにおける社会経済変動と文化的適応、研究代表者：宮本勝）による実地調査で得たものである。なお、一連の調査にあたっては、立本成文教授、パトリシア・レジス前サバ博物館館長ほか多くの方々にお世話になった。ここに感謝の意を表す。

14) 筆者の経験ではジャワの人々はどこにいようと東西南北を常に意識しているように思われる。たとえば、道順を教えるようなときでも「右に曲がって」などという相対的表現よりも「東に向かって (ngetan)」といった絶対的表現を用いる。5曜日による日の捉え方も同様であろう。

参 考 文 献

- Ali Umry Nasution. 1990. *Menyusuri Jejak Bangsa*. Kota Kinabalu : Bahagian Penerangan PERKISA Pusat.
- Balai Budaya Indonesia. n. d. *Anggaran Dasar PERKISA* (Perhimpunan Keluarga Indonesia Sabah-Sarawak). Kota Kinabalu : Balai Budaya Indonesia.
- Biro Pen Perkisa. n. d. *PERKISA DALAM BERITA*. Kota Kinabalu : Biro Pen Perkisa.
- De Graaf, H. J.; and Pigeaud, TH. G. TH. 1985. *Kerajaan Kerajaan Islam di Jawa—Kajian Sejarah Politik Abad ke-15 dan ke-16*. Jakarta : Grafitipers. (原著 De Graaf, H. J.; and Pigeaud, TH. G. TH. *De Eerste Moslimse Vorstendommen op Java, Studien over de Staatkundige Geschiedenis van de 15 de en de 16de Eeuw*. 1974)
- Feith, H. 1962. *The Decline of Constitutional Democracy in Indonesia*. Ithaca : Cornell University Press.
- Laksono, P. M. 1985. *Tradisi dalam Struktur Masyarakat Jawa : Kerajaan dan Pedesaan*. Yogyakarta : Gadjah Mada University Press.
- _____. 1986. *Tradition in Javanese Social Structure Kingdom and Countryside*, translated by E. G. Koentjoro. Yogyakarta : Gadjah Mada University Press.
- レグ. 1984. 『インドネシア 歴史と現在』中村光男 (訳) 東京 : サイマル出版会.
- Muhiddin Yusin. 1990. *Islam di Sabah*. Kuala Lumpur : Dewan Bahasa dan Pustaka, Kementerian Pendidikan Malaysia.
- 染谷臣道. 1993. 『アルースとカサル—現代ジャワ文明の構造と動態—』東京 : 第一書房.
- _____. 1995. 「ジャワ文明における海域世界と山域世界」『比較文明』(比較文明学会) 11号. 東京 : 刀水書房.
- 田中耕司他. 1993. 「座談会 東南アジア海域世界の森と海」『東南アジア研究』30 (4).